

『静思集』について

要 木 純 一

一、はじめに

我々が古典を読むのは、なぜであろうか。人それぞれ答えはちがうであろうし、一個人にあつても、時と場合によつて、多種多様な効用（インテレスト）を古典に求めていることであろう。その効用のうちの有力なものの一つとして、筆者はいにしへの歴史環境や風俗を知る喜びをあげる。すなわち、自民族のものにせよ、他民族のものにせよ、古典が書かれた当時のありさまが、いかに現在自分が生きる時代と異なっていたかを発見し感嘆する面白さである。この一種の異文化体験の快楽、それだけでも古典を読む効用として十分であると筆者は信ずるが、現代と違う価値観をもつた過去の状態を知ることが、ひるがえつて、現代の真のありようを理解する手助けにもなるのである。

一方、いにしへと今の世の相違を乗り越えて、人類普遍に該当する真理に、古典のえりすぐった表現を通じて、触れる（もしくは触れたと感ぜられる）ことも、古典読解の醍醐味である。しかし、今その快楽に浸ることを自制して、仔細に快楽の内奥を検討してみると、筆者は疑問を感じざるを得ない。例えば、現代の見かけの複雑さに眩惑された我々が、古代人の素朴さ、そしてそれに対応する端的で原初的な表現に接することによつて、真理に目覚めるといふ言説を、半ばは信じるが、半ばは果して然るかの感をもつ。古代人も、現代とはちがった、もしくは現代にも通ずる複雑さを有していたであろうことを見出すのは、どの分野の古典でも同様ではないか。

かかる理窟にもかかわらず、我々は相い変わらず、古典の中に普遍的な真理を感得するのである。そのメカニズムを

説明する力は筆者にはない。筆者としては、いったんは、古典がその時代において、同時代人にもたらしたであろう効用をあたうかぎり把握し感情移入する。その後、その段階にのみとどまらず、現代において、超時代的に古典がもたらす効用を考える。かかる態度を持して、古典研究を進めたいと考えている。

元末の小詩人の作品を読むことが、単に文学史の空白を埋め、元末の時代精神をくまなく知る効用があるというだけでなく、時代を越えた、文学という営み自体の面白さを知る効用があるであろうことを、元朝全土からみれば片田舎である江西行省（その主要な部分は現江西省である）南部に逼塞した小詩人郭鈺かくぎやくの別集『静思集』を素材にして、強調したいというのが、本稿の意図するところである。

『元詩選』の著者、清の顧嗣立は、その凡例の冒頭でいう。〔元詩選〕初集上 中華書局 一九八七 七頁〕

「颯風の始まる所は、同じく風騷を祖とす。騷人以還は、作者遞いに変ず。五言は漢魏に始まり、而して変は唐に（于）極まる。七言は唐に（于）盛んにして、而して変は宋に（于）極まる。有元に（于）迫んで、其の変は已に極まれり。故に宋由り唐に（乎）返りて而して諸体備われり焉。百余年間、名人志士は項背相い望み、才思の積む所は、発して詞華と爲り、蔚然として自ら一代の文章の体と爲る。上は唐宋の淵源に接し、而る後に有明の（之）文物を啓く、此れ元詩の選の緩がせにす可からざ（不）るの所以也」

これは、元詩が前代の諸詩体の極まったものであり、明代の詩の盛行へ導くという、文学史的価値をになったものであることを高らかに宣言した文章である。元の偉大な時代精神の中に、元詩を置いて頌揚している。一方、

「唐自り以前は、詩に刻本無し。其の伝うる所の者は、大抵は皆才人の妙筆、紙は人間に貴し、故に存する所は少なく、工みなる者は多し。宋自り以後、刻本は盛行し、流布に（于）易し、篇を連ね牘を累ね、工拙並びに陳ぶ、其の勢は必ず選より（于）出でて而る後に伝う可し。是の集の（之）成るや、敢えて選ぶと云うに非ざる也、姑く以て稍や繁蕪を汰して、其の雅正を存し、人の著わす所に随って、各自家を成す、春蘭秋菊は、其の真を失う母きに（于）期する而已」（同書 七頁、八頁）

ともいつており、この部分は文学史的に、時代的に有意味な詩をもらさずに選ぶというのが第一義であろうが、「春蘭

秋菊」という表現に、詩それ自体の時代を越えた価値を見出そうとしているかの如く筆者は感じる。すなわち、文学史からもれる詩ももたらさず、に所収したいという熱意である。その熱意ゆえに、大部の『元詩選』が後世に残された。

筆者も顧氏同様、歴史、文学史の観点から『静思集』を位置づけると同時に、それらの観点から見逃されそうな部分にも照明をあててみたい。

二、郭鈺及び『静思集』のあらまし

その前に、郭鈺の事跡について『中国文学大辞典』（吉林文学出版社 一九九二）の郭鈺の項目（四九五八頁 楊鏞氏担当）を引くことよって紹介したい。

「郭鈺（一一三一—一六一一）。元代の詩人、字は彦章、号は静思。吉水（今は江西に属す）の人。書香の門弟に（子）出身す。世よ朱子の（之）学を守って以て家法と為す。中年の時に正に元末に値い、曾て他郷に奔走し、売文を以て生と為す。明に入るの（之）後、勝国の遺民を以て自ら居る、洪武四年（一一三七一）詔りして秀才を挙げ、他は耳聾にして足跛するを以て由と為して試に与らず（不）。但し、原司は他を強迫して考試に参加せしめ了んぬ。世を去るの時は年六十歳を過ぎたり。元末の社会動乱中に在りて、他は曾て「一えに窮りて骨に到り、薪米給らず」（『静思集』卷一）、社会安定ならざる（不）自り以後、他は「事に遇えば感触し、情の（之）至る所は、中に（子）勃鬱として、自ら已む能わざれ（不）ば、則ち輒ち之を歌詠に形あはわす。或いは高きに登りて而して嘯き、或いは流れに臨みて而して嘆ず、壺を叩き節を撃ち、慷慨激揚す。商歌の（之）声は、隠隠として林壑を動かし、聞く者は其の妙為るを知る也」（羅大曰『静思集序』）他の（的）詩歌は的確に深深として社会生活に介入し了り、処る所の（的）時代の為に一部の詩史を留め下し了んぬ。著に『静思集』十卷有り、今に存す。『元詩選』初集は郭鈺の詩一七九首を收入す。他の（的）詩は、清麗にして法有り、格律は嚴整たり、乱離窮愁に涉及するの（之）作は、尤も其れ凄惋たること人を動かす。他は『感懷』、『殘年』、『風雨舟中の作』、『和して従弟銓に寄す』、『劉淵の寄せ見るるに和す』等の一系列の

七言律詩中に在りて、読者の為に国計民生に対するの(的)憂思を展示し了んぬ。顯然として杜甫の(的)影響を受け到れり、顧嗣立は、郭鈺に対して評価頗る高し、曾て郭鈺詩中の三四十条の警句を引称し過ぐ。郭鈺は周靈震ともと都に是れ元末江西の最も成就有るの(的)詩人なり。『四庫全書総目』も也また指出す、郭鈺の(的)『廬陵を悲しむ』、『武昌を悲しむ』諸篇は「尤も史伝の闕を裨するに足」り、是れ「慷慨激昂」たるの(的)佳作なり、と」

彼の詩歌が、「元末社会動乱」の「一部の詩史」たることは後に詳しく述べる。

彼の別集『静思集』には、諸本有るが、今『文淵閣四庫全書』所収本十巻を底本として用いる。その提要の書誌に関する部分を引けば、

「集の首めに洪武二年廬陵羅大己の序あり、……今按ずるに……『乙卯新元六十生辰』の詩有り。則ち其の明に入ること已に八年たり矣。……其の遺集は、本と家に蔵す。嘉靖間羅洪先は始めて序を為りて之を伝う。而して其の孫廷詔等は、編次の(之)法を知らず(不)、前後舛錯して、殊に義例無し。世に行わるること既に久しきを以て、今姑く其の旧に仍りて之を録すと爾か云う」

『乙卯(洪武八 一三七五)新元六十生辰』の詩は、正確には『静思集』(以下『集』と略す)巻五所収の『乙卯新元、余は年六十なり、目病又甚し。今を撫で昔を懷えば、感慨之に係る、適ま諸弟姪来賀す、因りて長句を賦す』詩であり、これによつて我々は、郭鈺の一三一五年生まれであろうことを知るが、実は巻五に「丙辰上巳(一三七六)……」の詩が有り、六十一歳以上は生きたことになる。

それはさておき、『静思集』はまず著者本人によつて編まれ、洪武二年(一三六九)羅大己が原序をつけ、後に家に蔵せられていたものに、羅大己の族孫である羅洪先(号は念庵、著名な陽明学者)が嘉靖四十年(一五六二)に序を附し、郭鈺の八世の従孫廷詔が整理出版した次第が、羅洪先の序に記されている。

『元詩選』初集、辛集(中華書局本、下冊、二二三〇頁)所集の郭鈺の詩と『四庫全書』本とを比べると、配列は同じで、顧嗣成は『四庫全書』本とほぼ同じテキストから詩を選んだものと思われる。ただし、『集』巻七所収の『即事』詩に序はないのに、『元詩撰』所収に序があるなど、『四庫全書』本の不備を疑わしむる点もある。

三、詩史としての『静思集』

『四庫全書提要』に「編次の法を知らず、前後舛錯して、殊に義例無し」とせられてゐるように、『集』のテキストは前後混乱を極め、まず歴史の中で『集』を論じようと企てる筆者にとつては都合が悪い。今、年号、干支などが明記されている詩を中心に、作詩年が憶測できる詩をまじえて、その『詩史』たるありようを再構成してみたい。但し、羅洪先が序でいい、『提要』が襲用するように「野史に裨せんがためではない。あくまでも郭鉦から見た当時の動乱のさまを追つていき、それが郭鉦の内面にいかなる影響を与えたかを見ていきたいのである。

その前に、江西特に吉水あたりの乱の経過を略述しよう。

江西では、後に西系紅巾軍で活躍する妖僧彭瑩玉が、早く後至元四年（一三三八）に袁州で決起して挫折するが、まだ若年であつた郭鉦にそれに関する詩はないようである。至正十一年（一三五二）工部尚書賈魯の黄河治水工事における微発をきっかけに東系紅巾軍の乱が河南安徽方面で起こると、湖北の蕲水でも彭瑩玉らに推されて徐寿輝が叛乱を起こし天完国を立てた。これが西系紅巾軍とよばれる。やがて江西に進出し、翌年（一三五二）にかけて湖広、江西の諸郡県を陥落、東の方杭州にまでせめよせた。しかし、翌年（一三五三）には、元軍に敗れ、徐寿輝は逃走した。やがて軍内部で勢力争いが起こり、徐寿輝配下の倪文俊が徐寿輝の暗殺を企てたが失敗（至正十七年 一三五七）。陳友諒が倪文俊を殺し、翌年（一三五八）江西省に進出、更に徐寿輝を殺して江州に都して漢国を立てた。その後、朱元璋との対立が激化し、至正二十三年（一三六三）の鄱陽湖の決戦で、朱元璋が勝ち、陳友諒は戦死、翌年（一三六四）漢国は滅亡した。この間、陳友諒の部下熊天瑞らが江西南部を支配下に置き続けていたが、至正二十五年（一三六五）、ついに朱元璋軍に降伏し、一三六八年の明王朝の成立を待つことになる。

『集』にあらわれる最も早い年号は至正十年（一三五〇）で、元末の乱が始まる直前である。但し、これは後に恐らく江西が朱元璋の下に服した頃にこの時期を回顧したものである。すなわち『集』巻八『羅伯英に柬す』（七律）の詩

の序。羅伯英は名は秀實、『集』の原序を書いた羅大己、更にのちの嘉靖年間に序を書いた羅洪先と同族であり、郭鉦の親友であった。

「庚寅（一三五〇）、辛卯（一三五二）年間に、余は伯英と（与）俱に桐江の上に客たり。時に賓從は甚だ盛んなり。兵乱自り十四年、惟だ余、伯英のみ重ねて到る。重ねて感ずる無きこと能わず（不）焉」
 反乱前は何の不安も感じずに楽しんでた。詩にいう。

「世事の榮枯は一日に分かれ、人生の感慨は中年に萃まる」

あの年から全ては暗転した。三十代半ばから人生は苦勞の連続になったのである。

恐らく、紅巾の乱の勃発から、詩集を編み始めたのは、この大乱が歴史上の画期であり、それに翻弄されたことこそが、彼の天命であったという詩人としての自覚があったのではなからうか。

北方の急が知らされる。卷十『辛卯（一三五二）徐州の警報を聞く。』（七絶）。

「河を塞ぎ詔りは下り丁男を選ぶ、明日彭城は野戦酣わならん。愁殺す翰林欧学士、白頭馬に騎りて江南を望む」

欧学士は、文人宰相として知識人間に人気の高かった欧陽玄か。黄河工事における徵発が反乱を引き起したであろうことを、遠く南方にあっても情報として知らされていた。後の補作の可能性なしとしないが、乱が広がる前の不気味さを印象づける。

西系紅巾軍が江南を席卷する。卷二所収『壬辰（一三五二）閏三月初三日、銚弟帰る。因りて其の語を録す。楚金諸君子に奉呈す』（五古）では、混乱の中、袁州で消息を絶っていた（卷二『袁州に警有り、舍弟銚の消息を見ず』）弟郭銚が帰って来たのを困んで、近隣の者が事情を聞くさまを活写する。そして賊を駆逐することが、我等の義務であることを弟が高らかに宣言するが、郭銚もまた振い立つ。

「九江は咽喉の地、戎卒は何ぞ草々たる。宜春坐して救わざれば、吾が土は敢えて相い保たんや。惟れ当に義旂を学び、力を戮ませて誅討を事とすべし。賊衆は乱にして且つ豈、一拳すれば秋葉のごとく掃われん。廬陵は忠節の邦、以て窮昊を正すに足る。鬱鬱たり英雄の姿、封侯何ぞ道うに足らん。惟だ我のみ最も迂懶、之を聞けば懷抱を展ぶ。

衣を振いて龍泉を舞わせ、請う三軍の導きと作らん」

「楚金の諸君子」が何者かわからぬが、閭里の奮起を促す役目を期待した詩であろうか。郭銍は、この時期、なお元朝に対する忠節の情は厚く、知識人として戦う気概が保たれていた。

ところが、吉水も一時占領される。郭銍は毎年元旦に詩を作ることを通例としていたらしいが、『癸巳（一三五三）元旦』の詩（卷七）は意気があがらない。（七律）

「屠蘇酒は暖かにして朝の寒きを破る、旧と写す桃符は再び見るに忍びんや。太史は未だ領せず周の正朔、遺民は親んことを思う漢の衣冠。天辺の星斗に孤檣は遠く、雪後の江山に万木は残わる。再拜す中庭に旭日を賓とするを、共に瞻る霽色雲端に散ずるを」

「周の正朔」「漢の衣冠」はもちろん元朝の威信をさす。都から遠く離れたこの僻遠の地が賊に蹂躪されたまま、放置されていることに失望する。第三聯はその心象風景として秀逸である。この年賊が退いたが、翌一三三四年も貧窮に苦しんで、なお意気はあがらない。『甲午元夕』（卷七、七律）。

「已でに釵釧の村醪に典する無く、兒女は羹を炊いて野蒿を薦む。灯火独り揺らす元夕の夢、干戈渾べて減らす少年の豪。雲は月色を韜うて天關に帰らしめ、雨は寒声を圧して布袍を欺かしむ。却つて憶う將軍の冠を平らぐる処、崑崙夜度りて勞を辞せざる（不）を」

卷三の『武昌を悲しむ』（五古）はこの混乱の時期に作られたと思われる。たのみにしていた元朝の兵が何らなすことなく瓦壊してしまった。

「武昌の兵甲は天下に雄たるに、王孫の節制は何をか為す者ぞ。白馬の將軍は飛びて江を渡り、壯士は弓を彎きて敢えて射す（不）。玉船未だ鸚鵡州を過ぎざるに、紅旗已に鏃く黃鶴樓。美人は散走す東南の道、一糸の楊柳千糸の愁。戦鬼は冤を銜み夜深に哭するに、王孫は独り淮南に在りて宿す。淮南の美酒は錢を論せず、老兵猶お唱う河西曲。九江昨夜羽書は伝わり、九江の太守は愁心懸かる。焉んぞ得ん書を持て天子に報ずるを、哀しき哉識らず顔平原」

王孫は、威順王の寛徹不花（『元史』卷一一七に伝あり）を指すらしい。反撃をせずに逃亡した為政者のふがいなさ

を嘆き、賊軍の江西九江に迫るを愁え、顔真卿の如き忠臣が存在しないのをいぶかる。『提要』がこの詩についていうように、「慷慨激昂の氣」に溢れており、郭鈺の純粹な愛国の心情がしのばれるが、未だ直接の乱を経験していないので、他人事であるかのような表現の冷淡さは否めない。「美人散走す東南道、一糸の楊柳千糸の愁」の部分などは、鬪の悲惨さよりは、修辭の面白さに意を用いているようである。

さて平和もつかの間、陳友諒らが中心となつた紅巾軍の第二波がおしよせて来、年代を審びらかにし得ないが、この時期に郭鈺は賊にとらえられて分宜県に幽閉され、逃亡の後、各地を放浪することになつたらしい。

吉安における動亂の経緯は、やはり『提要』が「慷慨激昂」の作としてあげた「廬陵を悲しむ」に詳しい。(卷二、五古)「至正十六年丙申(一二三五六)冬袁州の兵は城に逼り藤橋に屯す」からはじまり、一三五八年に吉安城が陥るまでを綿綿とつづつて、「此は吉安再陥の(之)略也」で結ぶこの詩の序は、賊軍の動靜はいうに及ばず、政府内の争いと裏切り、義軍の活躍を記して、まことに「野史を裨するに足るもの」である。詩も、先の「武昌を悲しむ」よりも痛切であり、具体的になつてゐる。

「義義たり青原の山、洋洋たり白鷺の水。炳炳として輿図を照らし、磊磊として多士は足る」

城は陥つたが、忠義を世に示すことの出来た廬陵(吉安)の氣概を誇る。このたびの抵抗には、序に述べたように、四人の忠義の士がたちあがり、また参謀であつた、同郷吉水出身の貢進士、蕭彝翁は殉節した。

「四忠と(与)一節と、流風甚だ伊れ邇し。往者義旗を挙ぐるは、事は匹夫由り始まる」

このように、庶民が率先して事に当たつたのに為政者の側はそれを裏切るばかりである。

「兵を連ぬること七年間、省臣は節制を兼ね。朝廷は安危を寄すに、幕府は奸宄を保つ。勢は驕り令図を改め、反側して久しく窺伺す。」

このていたらくだから、城は紅巾軍の手に落ちてしまふ。義士は後世に美名を残したが、これまできれいごとをいって名望を得ていた為政者は変節によつて空しく千年後まで悪臭をただよわすのみだ。

「紅旂は江を溯つて来たり、群雄は尽く風靡す。今日の売降人は、昨朝の清議子なり。奈何ぞ英雄なる姿、之に因り

て青史を穢す。朝は龍と虎と（与）為るも、夕は狗と鼠と（与）為り。芳を流すは動やもすれば百年、臭を遺すも亦た千祀」

このあたりは、執拗なまでに変節を責めている。動乱の苦難もさることながら、郭銍にとつてより堪えられなかったのは、人心の変転窮まりのない醜さであつたろう。これが心の傷となつて、以後の郭銍の人生觀に人間不信という暗い影をなげかけたように思われる。それでも、正義に斃れた人々がいたことは廬陵の誇りである。惜しむらくはその心意氣にこたえてくれる為政者がいない。

「嗟あ余が父母の邦、何ぞ忍びん独り深く嘗るに。恨む所は寧馨兒、磔磔として試みるを得ざるを。頼たのみに蕭參謀有り、身を殺して深き恥を刷ぐ。我は欲す白雲を裁ちて、情を滅して生死を問うことを。哀歌は肝腸を裂く、風に臨みて涙は洗うが如し」

先にも述べた蕭參謀の死については、卷七に『蕭參謀夔翁を哭す』詩（七律）がある。

「南州の進士は才名盛んにして、幕府の參謀は老成に仗る。筆舌は夜に星斗を揺らして動かしめ、襟懷は寒きに雪霜に激ぎて清からしむ。淮を平らぐるの碑は踏れて裴度に慚じ、郢を哀しむの魂は歸りて屈平に訴う。多謝す沔陽の劉太守、為に文詠を題して先生を弔むに」

権力者の内訌に犬死にしていく義士達を目の前にして何も出来ない苛立ち。せめて、詩をささげて後世に名を遺してやりたい。

この間作られた元日詩は、憂愁の影が深い。『丁酉（一三五七）元日』詩。（卷七 七律）

「城北城南は戦塵に暗く、東風は涙を吹きて衣巾に満つ。秦讐は猶お待す楚の三戸、漢將は徒だ封ず趙の四人。此の会屠蘇は濃味薄く、誰が家の桃板は旧題新たならん。神を江上に賽すれば情は海の如し、且く平安を祝して老親を問う」

戦乱のなか、不公平な恩賞が行われ、先行きが暗い中、人々は疲弊し、ただただ平安を祈つて神だのみをする。翌『戊戌（一三五八）元日』。（卷七 七律）

「戎馬七年猶お甲を帯ぶ、客懷は元日に詩を題するを厭う。愁い来たれば刁斗の声は相い続き、老い去れば屠蘇の酒は到ること遅し。野燒は暖かくして雲際の際を回らし、江梅は寒くして雪残の枝を護る。近ごろ聞く相を拝して舊日に登らしむと、郡国の朝正期に後るる莫れ」

恐らく故郷を離れて避難した中での正月。戦乱の收拾の見込みがないことへの苛立ち。初春自然の復活の中がかすかな希望がめばえる。しかし、末句の表現の裏には、やはり不安と苛立ちが隠れているように思う。

先に述べたように、これより後、郭鈺は各地を流浪したらしい。ある時は賊にとらえられたこともあった。卷十七絶、『分宜眞楼に題す』二首の序にいう。

「十一月初八日、楚金敗績す。余は分宜に拘えらる。因りて此の詩有り……」
其の第二首にいう

「独り江城に宿して故園を夢み、一襟の塵土に啼痕滿つ。老親は痴児在りと想わず、紙を剪つて応さに招くべし客路の魂」

まさか、親に先立つ不孝をほとんど犯しかねないような後半生が待っていないとは。乱後の急激な世の変化にただ茫然として涙を流すのみの郭鈺であった。

鄱陽湖の決戦（一三六三）後、江西は次第に朱元璋政權に帰順し、世情はようやく安静に向かう。卷六 五律、『己巳元日に従姪の瀾の韻に次す』の「己巳」（二三三九、または一三八九）は、当に「乙巳」（一三六五）に作るべきであった、平穩のうちに迎えた正月、統一へ邁進する世界をことごとく明るさに満ちている。

「太平応に象有るべし、王国早くも申を生ず。雲は虞淵の日を捧げ、天は寿域の春を開く。千年周鼎は重く、百戦漢兵は神なり。側かに想う朝元殿に、征南凱を献ずること頻りなるを」

ところがあにはからんや、賊軍の侵入により再び故郷を離れることを余儀なくされる。卷八に『乙巳夏五月、茶陵、永新の兵は奄に至る。遂に淦西に走る。暑雨旬に涉り、米薪俱に乏しく、旅途苦しきこと甚し、因りて詩を賦し諸を同行に示す』詩（七律）が収められている。

「白髮の遺民は真に哀しむ可し、途は窮りて猶お望む北兵の來たるを。関河の割拠は將に讖を成さんとし、將相の經綸は豈に材を乏しとせんや。足は爾まあり荒山に風雨走り、腹は飢え深夜春雷吼ゆ。主翁清曉人を催して発せしむるに、又報ず烽煙は楚台に逼ると」

不安に満ちた逃亡、たよりにならぬ官軍をむなしく待ち望む絶望感。五十歳になって、やっと戦乱もおさまり落ち着けたと思つた矢先であつただけに、疲労感はおさら濃い。

この詩の直後に収められている『重ねて禪寂院に題す』には、「六月兵退く」の序があるのでこのたびの避難は一ヶ月間と比較的に短かつたようであるが、心のダメージは大きかつたのであろう。更にその次に収められている。『丙午（一二三六）元旦、晴れて而して復た雨ふる。諸弟の俱に外に（于）留まるを憶う。情は辞に（于）見われたり』という、翌年例のごとく正月に作つた詩は、表向きは安堵感と将来への意欲を書くが、実は流離した兄弟を恋しい、漠とした焦りの「情」が「辞に見われ」ているのを読みとるべきである。

「父老は新年暁晴を卜し、桃花の春色は岩扇を照らす。兵を洗いて厭わず東風の雨、関を恋いて長く瞻る北極の星。常棣詩有るも空しく諷詠し、屠蘇酒無くして自ら清醒す。揮毫して客に対して桃板に書す、白髮は多きを添うるも眼は独り青し」

元旦、晴の予想が雨になつたということにしてからが、人を失望させるのに十分である。それを戦争が終わつて兵器の血を清めるに却つてよいとか（東風は朱元璋軍を暗示するか）、酒がないゆえに目がさめるとか、眼はまだ黒いとかくり返すのは、すべて不安を押し殺したやせがまんに類するであろう。

世は、朱元璋の全国統一に向かつているのに、肉体、精神が衰えた郭銍はひとり取り残されたかのような孤独感の中で憂愁の詩を書き続ける。『丁未（一二三七）人日』。（卷八 七律）

「誤りて喜ぶ新年七日晴れなるを、黒光は日を盪かして更に分明なり。陰陽元自ら相い消長す、中外何ぞ能く戦争を息めん。高くして視る山河王氣を分かつを、知らず（不）金石虚名を載するかを。麴生癡癩にして交情絶え、梅花を看ること偏くして晩に独り行く」

第五、六句は恐らく、朱元璋政権の出自のいかがわしさと将来の不安定を危惧したものであろう。不安に満ちた世界の中で「独り行く」しかないのである。

こともあろうに、朱元璋が即位して明王朝の成立を宣言した「戊申（一三六八）年間の作」なる注記を持つ『春望』詩（巻八 七律）は、新たな時代をことほぐ気持ちはなく、杜甫の『春望』同様、不祥と憂愁に満ちている。

「飢鳥磔磔として啼鴉に伴い、東風に倚るに倦んで両鬢は華なり。地を避くれば毎に幕に巢くう燕の如く、交わりを論ずれば誰か酒杯の蛇を弁せん。雲は望眼を遮りて芳草に迷わせ、雨は離愁を動かして落花を怨ましむ。懷抱は一時に何れの処にか写^すがん、甕頭の春酒は除るを須いず」

この「東風」も、先述したように朱元璋政権を暗示するとしたら、これは体制への不満を表現した危険な詩である。既述の如く、郭鉦は隠居して仕えることがなかった。巻九、七律「辛亥（一三七一）の秋、詔りして秀才を挙ぐ、余は耳聾して足蹙なるを以てするに、県司逼迫すること情に非ず。因りて短句を成す」にその心情を述べる。

「恭しく丹詔を承けて群材を網するも、空山に臥病して百念は灰なり。晋代は徒だ聞く三語の掾、漢庭は何ぞ待たん両生の来たるを。天関の虎豹は応に得るに難かるべし、雲錦の衣裳は裁つに易からじ（不）。寂寞たり西山双鬢の雪、独り能く永夜に三台を望む」

「三台」（北極星の周囲の星座）は何を暗示するか。地上の三公に対応する星座であるので、現世ではとても役に立たない廃残の身を自ら憐む心情を託しているであろうか。三台は、寿命を司る星でもあるので迫る死を意識しているのであろうか。いろいろな読みが可能であろうが、筆者は北の方の星を凝視する郭鉦が、今は北方に駆逐された元の旧帝にひそかに遠く思いを馳せていることを韜晦した表現ではないかと考える。すなわちこの詩も明王朝になびかぬ気概を示した。甚だ危険な詩のようである。

とはいえ、出仕しない最大の理由、或いは口実は、肉体の不調であった。翌年、更に右眼を失明する。巻九所収『壬子（一三七二）八月、余は目を病む、十月に至りて劇甚。因りて半ばを掩いて明を験ずれば、則ち右なる者は已に盲う。因りて自ら笑う。戊申（一三六八）の歳、右耳は聾を病む。庚戌（一三七〇）右脚は軟痛を患う。今右目を又喪う。朝

家に于いて半丁為り、廃せらるるを求めずして而して自ら廃す矣。強いて短句を賦して、写して中和及び仲簡に寄す」詩（七律）にいう。中和は姓彭、仲簡は姓李で、郭銍の親友であったことが、他の詩によつてわかる。

「白髮に病い侵尋して自從り、世を涉ること方に知る憂患深きを。面を吹く塵沙は須く目を眯すべし、名を求むる文字は少しく心を灰にす。旧書は尽く売り惟だ剣を留むるのみ、好酒は能く除き遽かに琴を学ぶ。樗散独り存するは天の賜う所、今従り志を肆いままにして雲林に臥せん」

病を逆手にとつて、住みづらい世に、無用の人としてできるだけ自由に生きて行きたい。世も太平になり、身の周辺も落ち着いて来た。それでも、想い起こすのは、乱が起る前の旧王朝の繁栄のことはかり。『癸丑（一三七八）首正』（卷九 七律）

「雨糸寒きに織る暮江の煙、春酒杯は深うして琥珀鮮やかなり。盲廢題するに倦し新甲子、醉來謾りに説く旧山川。貞元の朝士は今誰か在る、東郭の先生は毎に自ら憐れむ。藥物酒錢の償は報せんと欲するも、惟だ詩債を連れて新年に到る」

末句は創作力の低下を嘆ずる。それは肉体の不調にもよるであろう。だが今までは天命に突き動かされるように、「詩史」を編み続けてきたが、今やその役目も終わりつつあることを自覚している面も強いであろう。

先に言及した、六十歳のお祝いの際に賦した七古『乙卯（一三七五）新元……』も、穏やかな諦観の中で、来し方を思う。

「憶う昔軍麾は南国に満ち、性命の一糸は一息に懸れり。老天は年を与えて長貧を補い、白髮蕭蕭として今六十。」肉体の不調や失われた過去の追憶など縷々述べた後、つどつた親戚を前に、明るくしめくくる。

「甕頭の新酒は甜きこと蜜の如し、群徒は彬彬として元日を賀す。一庭は晴色氍毹軽く、醉筆重ねて拈れば百憂失す」翌一三三七年には吉水の北の景勝地南山に登っており（卷五所収『丙辰上巳 新喻の龔履芳、同郡の周公明、羅澄源、諸孫の仲雍と南山の絶頂に登る。帰りに零壇に息う。意羅如たる也。公明長句を賦す。次韻す』七古）、六十以後もしばらく余生を楽しんだようであるがその終焉は明らかでない。

四、時代を越えて

以上、時間軸に沿って、歴史と関連づけながら、『静思集』の詩を長々と論じたのは、まず時代の中におけるその詩の価値が重要であると考えたからに他ならない。だが、筆者は時代を越えて現代の地平でも論ぜられる価値を次に模索していきたい。

「詩史」として時代を写しながら、忠実な模写ではなく、むしろ自分の内面史に重点をおく、その詩風にしてからが、すでに「時代を越え」ようとする意志を内包しているといえるかもしれない。時代の波に翻弄されながらも、時代から距離をとろうとしているのである。『提要』は先の『癸丑首正』詩について「是れ其の故国を忘れず、跡を行吟に抗ぐ。志操以て概見す可し」と評価し、陳銚の作品について「其の生平を跡づけるに、大抵は兵戈に転倒し、道路に流離し、時事阽危の状を目撃す。故に諸を吟咏に見わす者は毎に愁苦の（之）詞多し」と述べている。杜甫の如く、一生を悲愁のうちに暮らした詩人としてとらえ、元朝への忠節を守り通して窮死したと見なしているのである。恐らくこの評価には羅洪先の序における「年は六十を踰えて竟いに貧死す」という表現に影響されたものと思われる。ところが先の六十歳の時の『乙卯新元……』の詩は、子はいないにせよ、一族に囲まれた自分を幸せそうに描いてそのような形跡は見えない。それどころか翌年以後も登山するほど健康であったかのである。ここは同時代の人である羅大己の序にたちもどらなければならぬ。

「予は其（郭銚）の題に泛作無く、必ず関渉あり、章に羨句無く、必ず警発有るを觀る。其の片詞單言と雖も、特に諧謔を出す。然れども亦た未だ嘗て聴く者をして之が為に怡然として喜び、赧然として愧じ使めずんば（不）あらず。其の世道人物天理民彝に於いて感發する所有り。是れ真に古えの詩人の諷刺の（之）義を得たる者なる歟、亦た其の養う所は、固より人に（於）異なる有る歟」

一言一句が諧謔や皮肉に満ち、人々を面白がらせ、感心させる。郭銚がユーモアに富んだ人柄であったことが忍ばれ

る。これまでは、「詩史」として彼の詩を論ずるために、戦乱における苦痛に満ちた詩を主にとりあげたが、『集』の大半を占める唱和詩はユーモアに富んだものが多い。戦乱や老残を描いた詩も、対象にのめりこむのではなく、一歩も一歩も引いた表現が多かった。先に引用した右眼失明を詠んだ『壬子八月、余は目を病む……』の詩も「因りて自ら笑う」といい、「朝家に于いて半丁為り、廢せらるるを求めずして而して自ら廢す矣」というのも、悲しみにのみとらわれず、失明によってこれでいやな出仕をせずに隠居出来る安堵感を、皮肉に表現する余裕が感じられる。

羅洪先は序でいう。

「憶う、静思の吾が族秀賓に贈る詩に云へる有り。「聖賢我を去ること遠く、茲の糟粕の味を糜す。其の得意の時に当たりて、何ぞ如かん郷相の貴きに」と。嗚呼、此は詩人の窮餓もて身を終え而して悔いざる所以也」

羅洪先の引用した句は、『集』卷二『大雪中に羅伯英過ぎ見る』に含まれる。伯英すなわち秀賓であろう。但し「聖賢去我遠、糜茲糟粕味。每當得意時、何如卿相貴」に作る。この句は解釈しきれぬ所があり、判断に迷うが、いずれにせよ、聖人が清酒の、賢人が濁酒の、いいかえであったという徐邈の故事を用い、更に「古人の糟粕」（『莊子』天道篇）等の語を意識して、まっとうな酒にありつけず酒かすをなめるほかないことを、大仰な言い回しで自嘲しているにはちがいない。眼目は、そのそこはかたなく漂うユーモアにあるのである。無論、赤貧洗うが如き生活ではあつたらうが、『糟粕』に「窮餓」の惨状のみを見るのには同意しがたい。

ユーモアが成立するためには、対象に不即不離であるべきことがよくいわれる。対象にとりこまれてしまつてはならないし、かといって無関心冷淡の域まで超越してしまつてもならない。大切なのは、対象への距離のとり方である。やや強引であるが、そこに『静思集』の時代を越えた価値を見てゆきたい。

郭鈺が詩に頻用する字をとりあげることによって、このことを論じよう。顧嗣成は『元詩選』で、「静思の詩は佳句存す可き者多し」と述べ、選に漏れた詩のうち、捨てるに忍びない対句を、五言では三対、七言では三十一対拾つて附録した。それらを見て特徴的なことは、「分」字を用いる句が多いことである。このことは、『集』全体についてもいえる。今、顧氏が拾つた佳句を左に引き、出処を示す。

「天辺春色は早く、窓外暮寒は分かつ」（『集』巻六「登楼」五律）

「野は廻かにして虹の光は暮雨を分かち、天は晴れて木の葉は秋風に響く」（巻七「宜春衛公岩に登る」七律）

「竹逕は墩を排べて坐客を留め、柳塘は水を分かちて比隣に過ぎる」（巻七「宋氏草庵に題す」七律）

「鳶は高風に敵いて擬して動かず、鴨は帰路を分かちて整いて相い排ぶ」（巻七「村居」七律）

郭鈺も唐人と同様「分」を「分断・分離」の意に用いたり、「分明」の意に用いたり、或いはどちらにも解釈出来るように用いているが、いずれにせよ、大切なのは、物事の「分断」なり「分明」なりを、距離をおいた醒めた感覚で見ていることである。

一方、郭鈺は、「分」の反義に近い「共」字を用いることもこのんだ。これは、応酬の詩が多いのであたりまえといえはあたりまえである。友人知己と「共」に美景を享受し「共」に文学・人生を論じたく思うのは自然である。ただ、

「艱危惟だ我のみ共にす、俯仰誰の憐れむを得ん」（巻六「黄州警有り……」五律）

「惜別無きを恨む尊酒の共にするを、溪に臨みて爾が為に清冷を汲む」（巻七「從姪淳に送別す」七律）

のように、「共」を句末に用いて、副詞的ではなく動詞的に用いて強調するように使う場合が多いのは、この字に対する思い入れがありそうである。こちらは、「分」の背後にある距離感とちがつて、人との距離をちぢめ、対象に密着しようとする志向が感じられる。このことからただちに、郭鈺が、時代に関心をもちつつ、時代をこえようとしていると論ずるのは飛躍がありすぎるが、彼の生き方とこれらの表現とは、底において、相通するものがありそうである。

このような郭鈺の態度について、一言しておきたいことがある。郭鈺が詩を応酬した相手は百人以上にのぼるが、文学史的に名を残した人は少ない。その少ない中で、ことに応酬が多く、注目に値する人物が楊和吉である。其の生涯の詳細は不明であるが、『灤京雜咏』百首を残したことが有名である。（『知不足齋叢書』第二十三集所収）これは、早く北方を旅行したところのある楊和吉が、往事の上都灤京の風俗を回顧して作った連作である。

『集』巻三に「陽（楊）和吉の『灤京詩集』に題す」詩（七古）がある。

「鈺也識らず灤京の路、君を送る幾たびか灤京に向かいて去るを。灤京の才俊は紛として往来し、好景は惟だ君のみ

能く賦す。太平自らは是れ佳句多く、況んや虞掲に逢いて心素を論ずるをや。金魚酒に換えて謫仙は狂し、彩舟は彈瑟して湘靈は助く。豈に知らんや帰るに煙塵に驚き、山中に門を閉じて華髪を生ずるを。雲氣蓬萊心未だ已まざるに、夢中猶在り東華の行に。貞元の朝士幾人か、少年の詩思は千載の名。西雲亭上何れの日にか到り、君が為に劍を舞わせ灤京を歌わん」

ここで気付くことは、灤京自体に対する具体的言及に乏しいことである。関心は楊和吉帰郷後の戦乱と不遇、世のうつりかわりに在る。「集」巻九の「楊和吉を哀しむ」は、その死に際して書かれたものであるが、

「茫茫たる天壤に名は長しなえに在らん、頼いに有り灤京百詠の詩」

といっており、郭鈺は『灤京雜詠』を無論重要な書物と認識してはいる。恐らく楊和吉に会えば、灤京や北方の風物についての会話がいつも弾んだことであろう。しかし、楊和吉との他の応酬作には、灤京のことは何も詠まない。不遇な友人への共感のみをうたう。筆者は、このような郭鈺の態度にも、時代に関心を持ちつつも、文学表現の場にあつては、少しく時代に距離をおこうとする気味を感じる。

かかる郭鈺の創作態度は、彼個人に特殊なものであつたのではなく、当時の江西の風土の中で育つたものらしい。『宋金元文学批評史』（一九九六 上海古籍出版社 顧易生、蔣凡、劉明今著）第四篇 金元文学批評（劉明今氏の執筆）第四章 元代中後期詩文批評 第二節 劉詵、王沂、楊維禎、王礼等関於師心、尚今の議論 は、尚古派に対して、「心を師とし今を尚ぶ」方向に傾く文学批評についてのべるが、そこに挙げられた劉詵、王礼、羅大已（『集』は「已」を「己」に作る）はみな江西吉安の出身であり、後二者は郭鈺と交渉があつた。

王礼の主張は、『宋金元文学批評史』の記述を借りれば、次のとおりである。（六 王礼、羅大已）
「王礼は一味の復古に反対し、代ごとに其の詩有り」と主張す、詩は当に「真情の実景」を抒写すべし、此が為に元初以来朝野の（之）詩凡そ一千三百余首を編みて、『長留天地間集』と為す、繼いで統編五百余首有りて『滄海遺珠集』と為す、……王礼は認めて詩なる者は「各の其の遇う所を鳴らす」と為す、故に代ごとに各の詩有り、古今相承く、古えは固より貴ぶ可し、今も亦た賤しむ可からず。故に他は充分に元詩を肯定し、以て它も亦た長しなえに天地の間

に留まり、古詩と肩を並べて而して愧ずる無かる可しと為す。……「各の其の遇う所を鳴らす」、「当に歌うべくして而して歌い、当に怨むべくして而して怨む」、明頭に是れ師心尚今的の創作態度なり。然れども王礼の這の一結論は却つて是れ前提有るの的なり、即ち「古えなる者は風俗淳美にして、民情和厚なり」……」

自分の境遇を思うままに詠え、但し正しい態度をもつことを条件として、というのが彼の主張の骨子である。

そして、彼の編んだ『長留天地間集』に郭銍の作品が採られたのであるが、名前をまちがえられてしまった。『集』巻九「王進士に寄す」(二首、七律)の序にいう。

「伏して前郷貢進士、王礼 子讓の刻する所の『長留天地間集』を觀るに、辱けなくも謬作を収めて其の間に廁く。心は窃かに愧ず焉。而して名を誤りて昂と為す、困りて筆もて意を寄す」

『長留天地間集』は、今にのこらないが、王礼と郭銍がお互いに認めあつていたことは確かであろう。

『批評史』があげた今一人の羅大巳は、先に述べたように洪武二年に『静思集』の序を著した郭銍の親友である。応酬の作もいくつかある。序におけるその文学上の主張は、「余は詩を能くする者に非ざる也。將に何を以て之が為に言わん哉。然りと雖も余は彦章(郭銍)の詩に於いて亦た感ずる所無かる能わず焉、何ぞ也」と謙抑を装いながら、なかなか過激である。

「国風雅頌は大抵皆古えの樂章にして、固より必ず音節を以て之が主と為すも而るに詩は性情に本づく者也。夫れ中人の(之)性情は偏る所有らざる能わず、其の偏る所に随い、其の至る所に夠えは、則ち溢れて而して声音と為り、発して而して言笑と為る。亦た各の自得の(之)妙有り焉。是れ豈に人力を以て強いて之を同じくす可けん哉」

また『宋金元文学批評史』の記述を借りれば、羅大巳は、

「亦た自ら得るを主として而して神情を倡う。観点は王礼と(与)相い近し。……注意するに値い得るは、羅大巳は此に在りて「中人の(之)性情」の(的)問題を提出し了んぬ。歴来、詩を論ずるに性情を主とする者は、必ず性情和厚なるを以て而して詩は始めて淳正取る可しとす、故に王礼は「当に歌うべくして而して歌い、当に怨むべくして而して怨む」と倡うるも亦た必ず「風俗淳美、民情和厚」なるを以て前提と為す。羅大巳は則ち一步を進み了りて、

他は「中人」の性情の（之）偏るを肯定し、偏ると雖も亦た其の詩の「溢れて而して声音と為り、発して而して言笑と為り、亦た各の自得の（之）妙有」るを妨げず。而して必ずしも正統派詩家の要求する所の如き（的）那の様に、先に性情を養いて性情正しくして然る後に詩と為すとせず（不）

郭銍の周囲にこのような主張をなす論者達があらわれるのは決して偶然ではあるまい。宋代の江西詩派以来、この地は伝統を重んじつつも進取の氣に溢れていた。伝統の圧力が比較的小さかった元の時代において、中央から離れて独自の文化を育てつつあった江西の地に、自らの感性にしたがって時代を越えようとする試みがめばえたとしても不思議ではない。元末の大乱で潰えてしまつたけれども。

五、おわりに

本稿は、元末の江西という、特殊な時代と地域で作られ、後に出版されなかつたら失われたであろう『静思集』が、文学史的には顧みられることもないのに、なぜ民族、時代を越えて筆者に感動を与えるのかという驚きからとりかかったのだが、その分析は間接的なものに終わってしまった。もつとレトリックの面白さについて説明できればよいのだが、今はその力がない。

われわれが古典を読むときに、それはどうして理解可能になるのか。それが筆者の年来の問題意識である。古典には古典独自の地平があり、現代に生きる人間にはそれと異なる地平がある。その二つの違った地平はつなげるべきか。つなげるならばどうやってつなげるか。冒頭でのべたように筆者は古典世界と現代世界の差異よりも、共通性の把握にとめたいと考えている。

古典と現代をつなげる試みとして、例えば大枠として東アジアの伝統なるものを措定する立場も有効であろう。しかし、筆者は、今少し、人類普遍的な、逆にいえば初歩的なレベルから考えていきたい。すなわち、文学の発生する場の共通性である。また、時代の中に生きながら、時代を越えたいと願う志向をもつ人間として、過去の同様の志向に共振

することから古典理解がはじまるのではないかと思う。

時代をこえることが時代精神であつたという逆説を抱える元末なればこそ、この時期の作品に筆者は共感を覚えるのである。